プロローグ

――中二病。

それは、人生で一度は通るかもしれない道。

主に、中学二年生の思春期の若者に発症しやすい、どこか恥ずかしい病だ。

ある若者は漫画やゲームに影響されて、自分は特殊な能力を持っていると錯覚してみたり。また、ある若者は少し大人ぶって、意味も分からずに小難しい書物を読んだりしてしまう、一種の自己愛だ。

大抵の人間は、高校、大学生になる頃には、自然に治っているのだが。中には、中二病を患ったまま大人になってしまう、そんな人も少なくはない。

クラス、または職場内に、中二病精神を持った人はいないだろうか。

一人いるくらいなら、まだそれは微笑ましい程度のものだ。

考えてみて欲しい。学校の一クラスが、全員中二病を患った生徒だけとしたら、どれほどカオスなことになるのかを。

この話は、そんなカオスなクラスで一年を過ごすことになった、俺こと伊藤弘明の物語である。

※

「どうしてこうなった……」

夏の暑さが厳しくなってき7月中旬。俺は学校の運動場の中心で、現在の状況に絶望していた。

学校行事である体育祭まで、あと3日。他クラスの生徒は、円陣を組んで気合いを入れているのにも関わらず、俺のクラスはというと。

「剣を抜け！　この世に混沌をもたらす王よ。今、この勇者ベルセルクが、お前の野望を打ち砕く！」

「それが己の出した答えか。よかろう、その決意に応えようではないか！」

ある二人組は、木の棒を片手にゲームのワンシーンを再現している。また、他のクラスメイトは。
「準備は整った。これで、異界の世界とのコミュニテェーショナムが可能となる。さぁ、偉大なる儀式の前に洗礼を」
運動場の一角に、大きな魔方陣のようなものを描き、変な呪文を唱え始めた。
他にも、某魔法少女アニメの変身シーンを練習する女子生徒。意味もなく筋トレに励む坊主頭。第一匍匐と第二匍匐を交互にし続ける生徒。
「これ、本当に体育祭の練習だよな……」
全く統率の取れていない状態に、俺は独り言を呟くことしかできなかった。いや、むしろ呆然と立ち尽くすことしかできなかった、と言った方が適切かもしれない。
おまけに、全て任せておけと言ったクラスの委員長は、運動場の片隅で発声練習を行っているし。
「そろそろ胃が痛くなってきたぞ。ったく」
「おや、どうしたんじゃ。そんな、狐につままれたような顔をして」
不安な表情を顔に出してしまっていたのか、古い言葉使いをするクラスメイトの一人が、俺の近くへやってくる。
「ひばりか。いや、これで本当に体育祭優勝できるのか、心配になってだな」
「何じゃ、そんなことで悩んでおったのか。全く、心配症な男だのぅ」
「心配症って。ひばりもこの現状を見て、不安にならないのか？」
このクラスで少しはまともな彼女に、俺は今の心情を打ち明かしたのだが、逆に鼻で笑われてしまった。
逆に、ひばりは俺と違って、今の状況を高く評価していた。
「不安も何も、見てみるがよい。彼らの生き生きとした姿を。みんな活気に満ち溢れているではないか」
確かに、全員本気を出して活動しているのだが、力のベクトルの向きが違うような気が。

誰も体育祭の種目の練習をしてないし。
「でも、まぁ。お主が不安になるのも致し方ない。この体育祭の優勝が、そちの今後の人生に、大きく関わってくるのだからな」
「今後の人生ねぇ……」
体育祭での優勝。そう、それが今の俺にとって、どうしても負けられない戦い。
もし、体育祭で優勝できなかったら、俺は一生自分を責めながら生きていく羽目になってしまうだろう。
今思うと、どうして俺はあの時、あんな約束をしてしまったのだろうか。雰囲気に流されてしまった自分に、正直嫌気がさしてしまう。
だけど、これも自分が選んだ道。それに、幼馴染みであるアイツのためにも。
「おっと、噂をしていればなんとかじゃ」
ひばりが見ている方に振り替えると、校舎から一人の女子生徒がこちらに向かっていた。黒髪に、制服がとてもよく似合う。
俺の幼馴染みの千奈津だ。
「ほれ、お主の許嫁じゃろ。行ってやったらどうだ？」
「い、許嫁じゃねぇ！　ただの幼馴染みだ！」
「どっちも同じようなもんじゃろぅ」
「ちげーよっ」
そんな軽いツッコミを入れて、俺は千奈津の方に向かった。

第一編

『えーっ。みなさんは、この由緒ある西里高校に進学したとあって、勉強、クラブ活動、また、友人などの交流を……』
春、入学式――
校長先生の話はどうしてこんなにも長いのか。
俺は、今にもはち切れそうな膀胱を抑えながら、必死に他ごとを考えてみるが、一度体を襲った尿意は引くことをしらない。

少し体勢を変えては、体を楽にしようと快みてみるが、逆にしまりが悪くなってしまう。
早く時間が過ぎてくれることを願いながら、体育館の壁に掛けられている時計をチラチラ見る。しかし、時というのは無常なり。
さきほど見た時よりも、2分しか針が進んでいない。
『かの有名な福沢諭吉は、初めての使節団としてアメリカに渡ったことがあり……』
いや、福沢諭吉の話なんか要らないだろ。むしろ、早く話を終わってくれと、俺は心の中で怒りをぶつける。
貧乏ゆすりのリズムも一段と早くなった。これはおそらく、限界に近づいてきた表れだろう。
「はぁ〜。入学初日でこんなことになるなんて、ツイてねぇな……」
そう、今日は俺の高校生活最初の日なのである。
新しい学校、新しい生活、新しい仲間を期待し、また、どこか緊張をして過ぎるはずの一日が。まさか、尿意によって全てが台無しになってしまうとは。
しかし、今考えると、これは全ての始まりの予兆だったのかもしれない。

※

長い入学式が終わった。
俺は、廊下一体を広がって歩く生徒の間をすり抜けて、猛ダッシュでトイレに向かう。
「くそっ。あの校長、話長すぎだろ！　なんで一時間半も話すんだよ」
おかげで、体育館のトイレは長蛇の列となっていた。遊園地のように楽しく待つことはできないと考えた俺は、校舎内のトイレを使うために、すぐさま体育館から抜け出した。
「よし、そこの角を曲がればトイレだ。俺は長い戦争から解放されるぞ！」
F1レーサ顔負けのコーナリングをして、廊下の角を曲がったのだが。

「きゃっ！」
「うおっ」
何か柔らかいものに体が当たった。声から察するに、女子生徒にぶつかってしまったのだろう。
「いてて。す、すいません。大丈夫ですか？」
俺は謝罪の言葉を入れつつ、ゆっくりと視線を下に向ける。相手は、ぶつかった衝撃で地面に尻餅をついて倒れていた。
黒髪のロングヘヤーで、制服のよく似合うとても可愛らしい女子生徒。
はて、どこかで見たような感じが……。
「もぉ～、酷いですよぉ。急に飛び出してくるなんて……」
女子生徒はこちらの方に顔を向ける。二人の視線が重なり合う。そして思った。俺はこの生徒を知っている。いや知りすぎている。
「お前……千奈津だよな？」
「えっ？　もしかして、弘明君？」
予想は的中した。彼女は、俺の幼馴染みの若宮千奈津であった。
子供の時から一緒に居ることが多く、小学校までは登下校を共にしていた。中学になってからは会うことがなくなってしまい、どの高校に進学したか分からない状態だったが、まさかここで再開するとは。
「一緒の高校だったとはなぁ……。少しは連絡ぐらいしてくれよ」
「そう言う弘明君だって、何も聞いてこなかったじゃない」
「そ、それは――お互い様ってことで。まぁ、一緒の高校になったことだし。これから昔みたいにやっていこうぜ」
そう言って、俺は千奈津に向けて手を差し伸べる。千奈津は少し照れながらも、右手を差し出す。そして、俺たちは再開の握手をした。
そのまま、俺は右手に力を入れて千奈津を立たせる。
「そういえば弘明君。急いでいたようだったけど、何か

用事でもあったの？」
「えっ……あぁ！　トイレに行くんだった！」
　トイレという単語を頭に浮かべた瞬間、さきほどまで吹き飛んでいた尿意が再び俺の体を襲う。しかも、かなり危険な状態で。
　ここで漏らせば一貫の終わりだと思い、俺は残った力を全て費やしてトイレに向かった。
　そんな俺を、千奈津は暖かい笑顔で見送ってくれた。

※

　入学初日、最初のホームルームの時間が始まる。
　俺は黒板に指定された席順通りに座った。場所は窓から二列目の最後尾。左隣の席には、千奈津が座っている。どうやら、同じクラスになれたみたいだ。
　俺と千奈津以外は全員初対面の人間であるためか、教室内は静まり返っていた。誰も何も喋らない。いや、むしろ誰も喋ろうとしていなかった。
　俺は、隣にいる千奈津と話がしたかったのだが、ここはちゃんと空気を読んで、じっと机に座り続ける。
　そこに教室の扉が開いて、一人の男性教諭が現れた。年齢は３０代前後、少し型崩れした背広を着て、どこかパッとしない雰囲気をしている。手には学生名簿を持っているので、このクラスの担任だろう。
　男性教諭は無言のまま教卓に立ち、クラス全体を見渡す。そして、一呼吸置いた後に。
「――混沌と絶望が渦巻く世界で、この神聖なる学び舎に足を踏み入れた諸君よ。はじめまして。私はこの一年間、君たちと共に血を分かち合うことになった山江だ。昔はよく、聖者の化身と呼ばれていたが……いや、止めておこう。この話をすると、再びあの悪夢が蘇ってしまう」
　教師がするとは全く思えない挨拶が始まった。
外見とは全く違った雰囲気と、呪文のように繰り広げられる話に、俺は思わず口を開けてしまう。一体何が始まったんだと、俺の頭は現状を処理することに精一杯だっ

た。
　他の生徒はどういう反応をしているか、ふと周りを見渡してみると、千奈津を除いた他の生徒は、全員真顔で教師の話を聞いている。
「……おっと、話が長くなってしまったようだ。それでは、自己紹介をしてもらおうか。ではまず、左前の君から」
「はいっ」
　前列の一番右にいる男子生徒が、大きな声を上げて立ち上がる。
　身長は少し高めで、中世的な顔つきをしている。どこか真面目な雰囲気は、彼の容姿から来ているのか、それとも別のものか。
「初めまして。このクラスの委員長になりたいと思っています。吉岡一郎です。中学校では生徒会長をしていました。自分の中で尊敬する人は、リンカーンとケネディです。なぜ二人を尊敬するかと言うと……」
　そのまま、長々とした演説に近い何かが始まった。
　おそらく彼は、演説するのが好きなのだろう。そうであるに違いない。
　吉岡の長い自己紹介が終わり、彼の隣に座っているイケメン風の男性に変わる。
「山田空だ。得意技は飛燕切と雷光段。魔王とドラゴンと妖精が住む町で、ハンター作業を勤しんでいる。共にハントしたい者は俺のもとへ」
　なるほど、彼は有名なＲＰＧが好きみたいだ。でも、その作品に影響され過ぎている部分もあるみたいだが。
　その次に教壇に立ったのは、物静かそうなセミロングヘアの女子生徒。
「私の名前は、松橋霧香。真名は、カムイ・クロノス。西洋より伝わりし古の黒魔術、インフィニティフラッドの極東教会に所属している。このクラス諸君に会えたことに、セラ・アウ・プル」
　……一体何を言っているのか分からない。
　俺の頭の中のハードディスク容量は、もうそろそろ限界を迎えようとしていた。

「やっほー、みんな！　川辺茜こと、魔法少女プリティーキュアフルだよ。ヨロシクね！」
その次に自己紹介をした女子生徒は、アニメ業界で有名な魔法少女アニメの決めポーズをする。
それを見て、俺の右斜め前に座っているデブの男子生徒が、テンションを上げながら拍手をした。
おそらく、アニメ好きなんだろうな。
「よし、前列の自己紹介は終わったな。次は2列目の貴女から」
担任の山江は、一番右側の女子生徒を指名する。
千奈津の前、俺から見れば左前にいる少し小柄な女子生徒が教壇に立つ。
巫女服が似合いそうなショートヘアの女子生徒は、少し古めかしい言葉を使って喋りだす。
「地元の神社から来た、八代ひばりじゃ。普段は、親の神社の仕事を手伝っておる。今後とも、よろしく」
丁寧にお辞儀して自分の席に戻る。
やっぱり、神社の娘だという予想は当たっていたようだ。
続けてひばりの右側。つまり、俺の前に座っている男子生徒が前に立つ。
「本日より、西里高校D組に着任しました。中山茂樹と申します。自分は、豚とホモしかいない田舎町よりやってきました。ここでは、どんな訓練にも耐えてみせます。よろしくお願いします！」
軍隊式の挨拶をして、中山は席に戻る。
彼は、きっと軍オタなんだろう。
「横山司です。よろしく」
先ほど、謎にテンションを上げていたデブの男子生徒は、簡単に自己紹介を済ませると、さっさと席に戻った。
そのまま、2列目の最後である坊主頭の男子生徒が教壇に立つ。
「ふっ、栗野学だ。事情があって、右手に包帯を巻かせてもらっている。おっと、詳しいことは聞かないでくれ。これ以上、無駄な犠牲を増やしたくないもんでね」
もはや、自己紹介とはどこに行ってしまったのだろうか。

クラスメイトがこんなにも個性的な自己紹介をされると、次にやる俺は一体どんなことを話せばいいのか。どうやら俺は、とんでもないクラスへ来てしまったようだ。

※

この学校に入学して、早くも2ヶ月が経過した。
クラス内の仲もかなり深まり、入学式よりだいぶカオスな状況を呈してきた。
もう、このクラスには誰も近づかない、そんな確信ができるほどに。
そして今日も、いつもの昼休みが始まろうとしていた。
「弘明君、一緒にご飯食べよぉ」
「おっ、そうだな」
俺はいつも、千奈津と一緒に食べることが日課になっていた。
席を繋げて、持参してきたお弁当箱を机に広げる。
「今日はね。弘明君のために、少し作ってきたんだよ」
そう言って、千奈津はミニサイズのお弁当箱を開けた。中には、食欲をそそるような具材が詰っている。
「おぉ、美味そうだな」
「時間がなかったから、味の方は保証できないけど……」
「大丈夫。千奈津の料理は世界一美味しいから。不味いってことはないよ」
俺は箸を具材に運ばせて、卵焼を口にする。その味は。
「……うん、おいしい！」
甘すぎず、辛すぎない絶妙な味加減が、卵本来の味を表に引き出している。一言で表現するなら、美味。
「やっぱり、千奈津の作る料理は最高だな。いつ食べてもおいしよ」
「えへへ、そうかな」
「千奈津は料理の美味しい、立派なお嫁さんになれるぞ」
「もう、弘明君ったら……」
俺の言葉に、千奈津は少し顔を赤らめる。
……なんかいいな。この雰囲気。まるで、初々しいカ

ップルのようで。
「ゴホンッ！　いつもお熱いな。お主たちは」
「フオッ!?　ひ、ひばり……居たのか」
「居たも何も、さっき戻ってきたのじゃ」
ひばりは、市販のコロッケパンと焼そばパンを机に置いて、自分の席からイスを持ってくる。
そうだった。ひばりは購買組の一人だったんだ。
「しかも、先に食べよって。せっかちじゃのう」
「ごめんね、ひばりちゃん。お腹が空いていたからついつい」
「まぁ、仕方ない。ただし、卵焼一個じゃぞ」
そう言って、ひばりはコロッケパンの袋を開ける。コロッケの詰った部分を口に入れて、美味しそうに頬張る。まるで、世界一美味しいパンは、コロッケパンだというように。
……そう言えば、ひばりは神社の娘だよな。なのに、どうしていつもパンなんだ。神社と言えば和食な気が。いや、むしろ洋食のパンなんか邪道な気がする。
頭の中で生まれたどうでもいい疑問が、探求心に火をつける。
俺はどうしても聞きたくなって、そんなどうでもいいことを尋ねてみる。
「なぁ、ひばり。お前いつもパンだよな。どうしてなんだ？　神社なら和食の弁当というイメージがあるんだが」
「好きだからじゃ」
「……それだけ？」
「それ以外ない」
「そうか――」
何か、すごくどうでもいい理由だったな。
まぁ、質問に深い意味なんて無かったが。とりあえず、飯食うか。
そうして、残りのおかずに箸をつけようとしたところで。
「きゃあぁぁぁぁ！」
教室内で悲鳴が上がった。

突然の出来事に、クラス内で騒めき起きる。一体何が起こったのかと。
声を上げたのは、俺らの近くで昼食を取っていた、魔法少女風の制服を着ている川辺だった。一緒にいることが多い松橋と共に、教室の後ろの方へ避難している。
「か、川辺さん！　どうしました!?」
クラス委員の吉松が、まず始めに動き出した。こういう時には、すごく頼りになる吉松である。
川辺は、少し震えた指で窓近くに指して。
「は、ハチです！　スズメバチ！」
そう、窓辺近くには重低音を響かせながら、スズメバチが飛び回っていた。しかも、親指サイズの大きいものが。
これはヤバい。そう思った瞬間、教室内はパニックになった。全員、ハチから離れるように四隅に避難する。
それを分かったかのように、スズメバチは傍若無人に教室を飛び回り始めた。
「くっ、敵飛行物体をコンタクト！　直ちに迎撃態勢に入る！」
自分の弁当近くにスズメバチが止まりそうになったのを見て、軍オタの中山は東京マズイのエアハンドガンを取り出した。
スズメバチに狙って引き金を引こうとする。
「おいっ！　止めろ、バカ！」
「ファイヤーッ」
隣にいるデブの横川が止めようとするが、一足遅かった。発射されたプラ弾は、スズメバチを掠めて机に当たる。
退治し損ねた上に、スズメバチを余計興奮させてしまったという最悪の事態に。
先ほどよりも攻撃的になった状態で、坊主頭の栗野の方へ。
「ふっ。遂に俺の右手の力を解放する時が来たようだな……」
スズメバチが近づいているにも関わらず、栗野は余裕を持った顔でいる。何か変な言葉を発しながら、ゆっく

りと右手に巻いた包帯を取っているが。
「この古より授かった魔王の力を、たかがハ――うおぉっ！」
スズメバチとぶつかりそうになり、背中を反らして回避した。
そのままスズメバチは、後ろにいたイケメンの山田の前へ。
「――メダル切りっ！」
山田は傘を真横に振りかざし、カッコよくポーズを決めた。とあるＲＰＧのワンシーンなのだろう。
しかし、残念ながらスズメバチには命中はしていないようだ。
「くそぉ。我がクラスでも、実力のある面子でさえ勝てないとは。スズメバチ……何という強敵」
「いや、あれがそもそもの実力なのか……」
しかも一人は、全力を出す前にスズメバチハチにやられたし。
俺がクラス委員の吉松にツッコミを入れている間も、他のクラスメイトはスズメバチに対して死闘を繰り広げていた。
「出でよ！　悪魔の化身！　我が右手に成り代わり、このメイガスクロスに死を！」
「燕切り！」
「激流に身を任せ同化する……」
「敵、９時の方向に緊急旋回！　すぐに目標を切り替える！」
ただ、今のところスズメバチには、全くダメージがないようだった。逆に、興奮させているような気も。
一方、隣にいる松橋は、後ろの黒板に魔方陣のようなものを描いている。
「今、この辺り一帯を魔方陣で覆ったわ。奴は当分、この結界に入ることができない」
「おぉ。よくやった松橋！　これで被害を最小限に食い止められる！」
クラス委員の吉松は、松橋に賛美を送る。だけど、この魔方陣は一体何の役割があるのか。まぁ、気休め程度

にはいいのかもしれないが。
「おい、そっちに行ったぞ！」
「なんだって!? この、私の魔方陣が破られるとは……」
「魔方陣、弱ッ!?」
彼らとの相手をするのが飽きてしまったのか。スズメバチは俺らのいる方向、しかも、千奈津に向かって突撃してくる。
「きゃあぁぁ！」
「クッ、千奈津！」
このままでは千奈津が刺される。そう思った俺は、千奈津を庇うように前に飛び出した。
「代わりに俺が犠牲になる！」
そんなカッコいいことを言いながら、俺は華麗に散ろうとしたところ。
「全く、騒がしいのう」
バシッ――。
何も動じずにパンを食べていたひばりが、割り箸でスズメバチを捕獲した。
そのまま、音を立ててジタバタするスズメバチを、教室の外に逃がす。
「……どうじゃ、これで安心して昼食を食べれるぞ」
ひばりの神業に、教室内はしばらく静まり返って、そして。
「や、やったぞ！」
スズメバチを撃退することができて、歓声が沸き上がった。
まるで戦場の英雄かのように、ひばりはクラスメイトからもてはやされる。
しかし、一方の俺はと言うと。
「……なんか、恥ずかしいな」
下手にカッコつけて、逆に自滅してしまった感じがする。言い換えれば、英雄になり損ねたような。
「昼飯、食べるか」
「そうだね」
俺は何とも言えない敗北感の中、席について弁当を食べようとするが。

「お～い、お前ら。もうチャイム鳴ったぞ。席に戻れ～」
もう5限目が始まっていた。国語の教師が出席簿を持って部屋の中に入ってくる。
昼食を食べ損ねた俺は、その日一日、空腹を我慢して過ごす羽目になった。

第二幕

6月、梅雨――
天気があまり良くないある日の帰り道。俺と千奈津はとある現場を目撃してしまった。
それは、同じ高校の制服を着た生徒数名が、太った生徒を集団でいじめているようだった。場所は人が全然通らない、高架下のトンネル。
この道を通る学生は、現場を避けるようにして通っていく。まるで、見て見ぬふりをするかのように。
「ど、どうしよう……弘明君」
「そりゃ、助けに行くしか――」
よく見ると、中心でいじめられていたのは、同じクラスのデブの横川であった。
「いや、助けに行くぞ」
さすがに同じクラスの生徒がいじめられているのを、見て見ぬふりはできない。
俺は千奈津を後ろに引き連れて、集団の中に突っ込んでいく。
「おい！　お前ら、何やってるんだ！」
「あぁ？　何か文句あるのか！」
「あぅ、い……伊藤か」
横川の周りにいるのは三人。二人は体育会系の体格をしている。同じ色のネクタイをしているので、同学年のB組かC組の人間だろう。
俺が乱入したことによって、横川の腕を掴んでいた一人が手を離した。これはチャンスだと思って、俺は大声で叫ぶ。
「横川、逃げろ！」
「あ、あんがとう。恩に切るよ」

今の隙を見て、横川は急いでこの場から立ち去る。
「お前！　どこのクラスの人間だ？」
「彼と同じD組だ」
「D組ぃ？　お前もアイツと同じ、底辺の人間か」
体育会系の二人が、俺の近くに言い寄ってくる。二人のリーダーと思われる一人は、後ろの方で俺とのやり取りを傍観していた。
「底辺で何が悪い？　クラスメイトが困ってたら、助けるのが道理だろ」
「ほう……義理深いねぇ。そんなに、クズ共に肩を入れるとどうなるか、思い知らせてやる」
体育会系の一人が、拳を握りしめて殴りかかってくる。
さて、これからどうするか。
俺はここまで乗り込んだにも関わらず、これか先のことを何も考えていなかった。
このまま反撃をするべきか、大人しく殴られるか、それとも尻尾を巻いて逃げ出すか。
ただ分かるのは、目の前に大きな拳が迫ってきていることだけ。
避けないといけない。そう思って、体のバランスを左に傾けた時。
「おい、ちょっと待て！」
リーダー格の一人が、止めるように声を上げた。
大きな拳が、俺の目の前で寸止めされる。
「えっ？　ちょっと、御船さん。　どうして止めるんですか？」
体育会系の二人は、リーダーの御船が止めに入ったことを、理解できていないようだった。もちろん、それは俺もだが。
御船は部下の一人の質問を無視して、俺の後ろにいる千奈津の方へ向かう。
千奈津に一体何の用事があるのか。
黙って見てみると、御船は千奈津の顔をジッと見て、何かを確信したかのように話出した。
「……やっぱり、千奈津だよな。覚えているか？　俺だよ、俺。御船だよ」

「えっ？　ええっと――」
「ほらっ、小学校の時一緒だった。同じクラスで結婚を約束した」
「ひ、人違いじゃなんですか。私、御船なんて人……知りません」
「そんな、酷いなぁ。この俺を忘れるなんて。そうだ！　これから一緒にどっか行かない？　一緒に居れば思い出せるよ」
「いや！　放してください！」
御船は嫌がっている千奈津の手を、強引に引っ張ろうとする。
これ、どっからどう見ても悪質なナンパだよな。止めなと。
俺は困っている千奈津を助けるために、二人の間に仲介に入る。
「あの、ちょっと急に何ですか。彼女、嫌がってますよ」
「そんなの、お前には関係ないだろ。千奈津の彼氏でもないくせに」
「うッ……。か、彼氏ではないが、彼女とは幼馴染みだ。嫌がっていることぐらいは分かる。いいからその手を放せよ」
「ふんっ！　幼馴染みぐらいが偉そうに。俺はコイツと結婚を約束した仲だ」
「う、嘘よ！　助けて、弘明君！」
「そこまでシラを切るつもりか、こっちは証拠があるんだよ。ほらっ！」
そう言って、御船はポケットからボイスレコーダーを取り出して再生ボタンを押した。小さなスピーカから、幼少期の千奈津の声が聞こえてくる。
『――私、御船君と……将来、結婚します……』
小さな機械から聞こえてくるか弱い声。
高架下に鳴り響くその事実に、現場にいた人たちは静まり返った。
俺は突き付けられたその現実に、何が起きたのか把握できない。
御船は、完全勝利した顔つきでボイスレコーダーの停

止ボタンを押す。
「……もう言い逃れはできないだろう。これが証拠だよ。証拠。さぁ、千奈津。行こうか」
「い、嫌……」
「ちょっと待て。そんなの、小さいとき約束だろ。今は関係のないことだ」
俺は必死に現実を否定する。しかし、周りから見れば、引き際を分かっていないように見えるだろう。
そんな俺を、御船は呆れた顔をして見下す。
「まぁ、今更こんなこと言われたって信じたくないよな。それに、このまま終わっても後味が悪いし。一つ勝負をしよう」
「勝負？」
一体コイツは何を言っているんだ。
最初に思い浮かんだのは、この一言だった。
そして、これで千奈津を救えるなら、勝負を受けようと俺は思った。
「そう、勝負だよ。これで勝ったら、俺はこのまま君らの前から消える。どうだ？」
「本当に……約束は守ってくれるんだよな」
「嘘はつかない。ただし、こっちが勝ったら分かっているよな」
……俺が潔く消えろってことか。
まぁ、このまま何も解決せずに過ぎるより、何か大きな勝負をして決めた方がいいかもしれない。
俺はそんな安易な気持ちで、勝負を受けることにする。
今考えれば、これが人生最大の失敗だったのかもしれない。
「分かった。その勝負を受けよう。っで、勝負の内容は？」
「7月の半ばに体育祭があるだろ。そこでクラス、君たちD組が優勝したら、君の勝ちだ。ただ、俺達C組が優勝すればこっちの勝ちだ」
クラスで優勝だと!?
それだと、スポーツができるB組やC組が有利な気がする。いや、絶対有利に決まっている。
「ちょ、ちょっと待て！　それ、どこか不公平だ」

「もう決まったことだからな。男なら細かいこと気にするな。まっ、せいぜい頑張れよ」
俺の意見を全く聞き入れずに、御船は他の二人を連れて俺達の前から消えていく。
――これは、大変なことになってしまった。

※

「頼む！　吉松！　俺達を助けてくれ！」
体育祭の勝負が決まってから、数日が経過した。
とある放課後。俺はクラス全員を説得するために、ひとまず委員長の吉松に話をした。
クラスの中で一番のまとめ役の彼に話せば、何とかしてくれる確信があったからだ。
「なるほど。それで、クラス全員に協力を仰いでほしいと……」
吉松は少し暗い顔をして下を向く。
やはり、クラス全員に頼むのは無理のあることなのか。
そう思い、半分諦めたような心情でいたのだが。
「ふっ、ふふふふ――」
急に、吉松が下を向きながら笑い始めた。
何かおかしなことを言った覚えはない。むしろ、今までの会話で笑える場所なんてなかった。
「ふっはははっ！　そうか。体育祭で優勝か。面白い！　これで、他のクラスを見返すことができるじゃないか！」
「えっと――吉松？　大丈夫か？」
「伊藤。お前はいい考えを出してくれた。体育祭までは俺も考えていなかったよ。お前らの件は任せておけ。俺がクラスを説得してやる」
「は、はぁ。それはありがたい」
「早速、明日の放課後にクラス全員を集めて話をしてみる。伊藤は大船に乗ったような気でいろよ」
そう言って、御船は教室を出ていく。
大船に乗ったようにいろと言われたが、本心は不安で一杯だ。ちゃんとクラスを説得することができるのだろ

うか。
それよりも、このクラスが体育祭で優勝ができるのか。
そう考えながら俺も教室の外に出ると、廊下では千奈津が待っていてくれた。
「おう、千奈津。待っていてくれたのか」
「うん。だって、いろいろ弘明君に迷惑かけちゃったから」
「そんな、気にしなくてもいいのに」
「き、気にするよ。だって、私のせいでこんなことに……」
千奈津は今回の件で、かなり責任を感じているようだった。
そんな中、俺はレコーダーの内容が本当なのか確認をする。
「それで――千奈津。あのボイスレコーダーのことだが。本当に、あんなことを言ったのか？」
「……」
「言いたく無いなら無理には聞かないが。あれは、本当に千奈津の本心なのかを聞き――」
「昔……弘明君が一年間いなかった時に。私、いじめられていたの。あの、御船って人に」
「えっ!?」
初めて聞く真実に、俺は驚きを隠すことができない。
まさか、俺がいない間に千奈津がいじめられていたとは、全く考えていなかったからだ。
千奈津は、辛いかもしれないその過去の話を続けて俺に話してくれる。
「ちょうど、弘明君が海外に引っ越していた年だった。内気で話すことが苦手だった私を、御船って人は狙ったようにやって来た」
「それで――あんなことを言わされたのか」
「うん……。もし、言わなかったから、私、もっと酷いことをされて――」
過去の辛い気持ちが蘇ってきたのか。千奈津の声のトーンが一段下がる。
このまま話をさせて、嫌な過去を思い出させるのも悪

いと思い、俺は話を止める。
「もういい。大体のことは把握できた。それで、千奈津に一つ聞きたいんだが」
俺は千奈津の顔をジッと見て、真剣な眼差しで一つの質問をする。この質問の返答によって、俺がやるべきことが決まってくる。
「……御船ってやつに、好きだとか。結婚したい気持ちは全くないんだよな」
唐突な俺の質問に、千奈津は少し戸惑った表情を見せる
そして、俺がどういうことを知りたいのか察しが付いたようで、千奈津は芯の通った声で質問の返事をする。
「――私、そういう気持ちは全くありません。今までも。そして、これからも」
「……分かった。ありがとう」
これで、明確に御船という奴と戦う意味を見出すことができた。
それだけで、千奈津を守るという断固たる意志が芽生えた訳だ。
後は、D組のクラスメイトが俺達に協力をしてくれるかだ。それは、クラス委員の吉松に任せて、明日の放課後を待つだけである。

※

翌日の放課後――
最後の授業が終わり、他のクラスメイトは全員帰ろうと準備をしている。
そんなざわついた雰囲気の中、クラス委員の吉松は颯爽と教壇に立つ。
「え～、クラス委員の私から、皆さんに話したいことがあります！」
吉松は声を高らかに上げて、帰ろうとする人を引き留める。
幸いにも、先に帰ってしまった人は誰もいなかった。他ごとをしている人が居ないかを確認してから、吉松は

持ち前の喋りを繰り広げる。
「君た――」
ここからは話が長くなりそうなので、少しばかりカットする。
ただ概要だけ言ってみれば、俺達の存在意義の話から始まり。
他クラスから圧制を受けている事実や、横川が一番優秀なC組の人間にかつあげされていたこと。また、俺と千奈津にできた問題などについて、吉松は熱く語りかけた。そして。
「――みんなの力がいるんだ！　体育祭で優勝して、他クラスを見返してやろう！」
協力を仰ぐような形で、話を終わらした。
話を聞いて、クラス全員の反応はというと。
「わぁぁぁぁっ！」
拍手喝采であった。
これはおそらく、クラス全員が吉松の話に共感をしたということだろう。
「ふっ、遂に俺達の実力を見せる時かきたようだな……」
坊主頭の栗野は急に立ち上がり、謎のポーズを決める。
さて、あれは一体何の恰好であろうか。
「私の黒魔術の力が役に立つときが来たようね」
「俺の覚えた技を見せてやるぜ」
彼らの力が役に立つときがあるのか。いや、あるんだろうな。きっと……。
「みんな！　ありがとう！　早速、明日から練習を始めよう！」
吉松は、協力してくれる全員の前で一礼をする。
ここは、俺もみんなに感謝の言葉を言わなければ。
「あの――俺と千奈津の問題で、みんなに迷惑かけてしまって本当にすまない。だけど、これ以上クラス間の迫害を許してはいけない。みんなで一緒に、優勝目指して頑張ろう！」
――という感じで、俺とD組のメンバーは体育祭で優勝するために、クラス一丸となって練習をしているわけ

だ。
しかし、現状を見る限りでは、優勝という結末はほど遠いような気がするが。
今日の練習が終われば、体育祭まで残り2日しかない。
果たして、俺たちには一体どういう未来が待っているのだろうか。
「そんな心配した顔をするのではない。みんなを信じるのじゃ」
このひばりの言葉に頼ること。それしか、今の自分にできることは何もなかった。

第3幕

そして遂に、体育祭本番の日がやってきた。天気は晴天。絶好の体育祭日和であった。
長い校長先生の話と開会式を終えて、それぞれ設置されたクラスのテントに戻る。
俺達D組は、クラス委員である吉松リーダーの元、綿密な作戦が組まれていた。
「この学年の競技は全部で8種類。午前に5つ、午後に3つだ」
テントの中心に置かれた競技科目の紙を取り囲み、まるで戦場の作戦会議のようにして、各競技の対策が行われる。
吉松は、それぞれ一つずつ的確に指示していく。
「各競技二人まで出場が可能だ。競技内容に一番あった人を選んでいくが、異論はないか？」
「問題ない」
軍オタの中山の返答に、クラスメイトは全員頷く。誰もこの作戦に不満はないようだった。
「なら、競技毎に選抜を始める。一番初めの玉入れからだが……」
吉松はクラスメイト全員を見渡す。このクラスの中で、肩の力がある人間を考察しているようだった。
「……よし、栗野と中山。頼めるか？」
このクラスで球技系スポーツが得意な栗野と、比較的

運動神経がいい中山が選ばれる。誰も文句ないチョイスだ。
「ふっ、委員長に言われたなら仕方ない。やってやろうじゃないか」
「イエスッ、サー！」
「よし。なら次の競技は剣道だ――」
そうして、全競技の役割分担がされていく。
剣道に出るのは山田とひばり。絵画対決は松橋とひばり。障害物競走は中山と吉松。仮装対決は川辺と千奈津。昼休憩を挟んで、綱引きで俺と横川。そして、最後の徒競走には俺が出る具合になった。
競技内容がいろいろとおかしい気もするが、これがこの高校の伝統らしい。学年が上がるにつれて、真面目な競技内容になっていくみたいだ。
まぁ、これでD組が勝つことができるなら、ある意味運が良かったのかもしれない。
普通の競技では、絶対にB組やC組には勝つことができなかっただろう。
「よし、これで全員の役割が決まった。みんな全力を尽くして頑張ってくれ！」
こうして、俺達C組の体育祭が幕を開けた。

※

『では次に、一年生最初の競技、玉入れです！』
体育祭特有の音楽と共に、数名の生徒が入場する。
フィールドの中央には、運動会でお馴染の籠と布の玉が準備されている。
クラス毎によって色が分かれており、我らD組は黒色だった。
「黒色か。ふっ、俺の右手が疼くぜ……。奴らも色の選択を見余ったようだな」
玉の色によって何かが変わると思わないが、栗野の調子が出るのなら、それはそれで良かったのかもしれない。
ちなみに俺は、得点係として栗野たちの近くにいる。
『それでは準備してください！』

スタート前のアナウンスが流れる。
栗野はいつも付けている右手の包帯を外した。これは、本気を出すということなのか。
一方、中山は玉が一番落ちているところへ移動している。
『位置について。よ～い……』
――パンッ。
スタートを合図する空気銃の音が鳴り響く。
同時に、中山は近くに落ちている玉を一斉に拾い上げる。
「うおおぉぉぉぉぉ！」
そして、思いっきり真上に投げ始めた。
『D組、玉を真上に投げています！　これはどういう作戦なんでしょうか！』
いや、本当にどういう作戦だよ！
俺は近くで見ているが、中山が投げた玉は空中で止まり、そのまま下に落下している。
これでは一つも入らない気が……。
「――フレイムヘイズ！」
そう大声で発すると、栗野は一斉に玉を投げた。しかも、中山が投げた玉に向けて。
籠よりも少し上のところで、落下している玉と栗野が投げた玉がぶつかり、そのまま２つとも籠の中へ。
『D組、凄いです！　一つも外していません！』
「す、すげぇ……」
解説が言った通り、二人は玉を一つも外さずに籠の中に入れている。これはある種、神技に近いかもしれない。
俺は、初めて栗野の凄さを実感した。そして、彼が常に包帯を巻いている理由が分かったような気もする。
「俺は、堕天した天使が嫌いなんだ。だから、こうやって空から降りてくる天使を捻りつぶす。ふっ、人間のすることじゃねぇな」
ただ、彼が何を言っているのかは、理解するのにもう少しかかりそうだ。
そして、そんな神技を傍観しながら数分が経過して。
――パンッパンッ。

終了の合図か2回鳴る。これ以降、競技を進めたら失格になるので、全員その場に座り込む。
俺は得点係として、籠に入った玉を数えるが……。
「これ、元々玉がいくつ置かれていたか見た方が早いな」
なぜなら、栗野と中山は全ての玉を、籠の中に入れたからだ。
俺は用意されていた玉の数を確認して、大会本部へ連絡する。
むろん、この競技の一位はと言うと……。
『え～、先ほどの競技の優勝はD組です！』
我らD組であった。2位はC組で、3位はB組という順に続く。
これでひとまず一位を獲得できた訳だが、問題はこのまま順位をキープできるかである。
そんな不安をのせたまま、次の競技は始まる。
2番目の競技は剣道であった。D組はイケメンの山田とひばりが出場する。
ちなみに、ひばりは神社の娘とあって日本武道にはだいぶ精通しているらしい。山田は、中学時代剣道部だったとか。
「なぁ、ひばり。お前、本当に剣道できるのか？」
競技は始まる間、俺は近くで待機しているひばりに話かける。
ちょうど、ひばりは簡易式の防具をつけているところだった。
「なんじゃ？　わしに不安でもあるのか」
「いや。正直、ひばりが剣道していたなんて、考えてなかったから」
「心配するな。こう見えて地方大会は優勝できた実力じゃ。すぐに負けたりはせん」
「信じていいんだな」
「任せておけ」
そう一言残して、ひばりは中央に設置された試合場へ行く。
「……まぁ、ひばりだし。あいつなら心配いらないな」
そうして、第二種目の剣道が始まった。

フィールドの中には４つの試合場が設けられて、トーナメント形式で試合が進められる。
一回戦目。ひばりはＢ組と、山田はＡ組と戦うことになっている。
剣道経験者の二人の結果はというと。
「っメーン！」
「一本！」
ひばりは綺麗な一本勝ちをした。
相手のＢ組は、剣道部でも中堅レベルの腕のある人物。そんな彼に数秒で勝つとは、ひばりはかなりの実力の持ち主のようだ。
一方、かつて剣道部だった山田は。
「――飛燕斬ッ！」
自己流のスタイルで竹刀を振り回している。
剣道とは少し違った競技のようにも見えるが、強いからいいか。
「――剛龍閃光剣！」
「い、一本！」
決め台詞と共に、山田は爽やかポーズをする。その瞬間、そっち系の趣味の人達から大きな歓声が上がった。
どうやら、この学校には山田の熱狂的なファンがいるみたいだ。
「と、とりあえず。これで二人とも一回戦目突破だな」
参加人数が少ないため、次の２回戦目が準決勝となる。
ひばりと山田は一回戦目を突破したので、３位以上になることは確証された。
このまま次も勝ってほしいのだが、人生そんなに上手くいくこともなく。山田はＣ組の剣道部副将に負けてしまった。
ひばりは何とか引き分けまで持っていき、判定でＣ組の相手に勝ったのだが、決勝戦では圧倒的な力の差で負けてしまった。
結果、第二種目の剣道の一位はＣ組。２位がＤ組となった。
残りの競技数は６種類。
俺たちはいつまで一位をキープし続けることができ

るのか。

※

得点係の仕事を終えて、ひとまず俺はクラスのテントに戻る。

今は他学年の競技がやっているので、一年生側のテントは比較的自由になっていた。

持ってきたゲームをやる者、英単語帳と睨めっこしている者を眺めながら、俺は一番端にあるD組のテントにたどり着く。

「委員長。今のところ得点の差は……うおっ!?」

靴を脱いでテントの中に入ろうとしたところで、俺は千奈津の姿を見て驚く。

さっきまで体操着を着ていた千奈津が、いきなりフリルの付いたかわいい服を着ていたからだ。

「あっ、伊藤君。ちょうど良かった。どう、千奈津ちゃんのコスプレ姿？」

同じように、制服に似たようなかわいらしい服を着た川辺が俺に質問してくる。

おそらく、彼女が着せたんだろうな。

「どうって、そりゃ……」

俺は、もう一度千奈津のコスプレ姿を拝見する。

いつもなら着そうにない、ピンク色のした制服のような衣装。

下ろしている髪の毛を、ツインテールにして結んでいるその姿は、清楚さとは違う別のかわいさを出している。

簡単に言ったらギャップ萌え。

やばい。俺、変な方向にハマってしまいそうだ……。

「そ、その。弘明君……。あんまりジロジロ見ないで。は、恥ずかしいから」

そう言って、千奈津は顔を赤らめる。

体をもじもじさせて照れているその姿は、男心をくすぶらせる。

なるほど、これが萌えというものかと、実感させられる何かがあった。

「……かわいいな」
「やっぱり、伊藤君もそう思う。なら、この衣装で決まりね」
「決まりって、まさかこの衣装で種目に出るのか？」
「そうよ。委員長がアニメのコスプレがいいって言ったから」
確か、二人が出る種目は昼休憩前の仮装対決。簡単に言えばコスプレバトルだ。
それなら、この衣装で出てもおかしくはないな。
ただ、千奈津のこの姿を男どもに見られると思うと、どこかやるせない気もするが。
「どうした？　他の男どもに、千奈津が見られるのが嫌なのか？」
「ばっ、ちげーよ！」
「伊藤君。顔に分かりやすく出てるよ」
「なにっ!?」
ひばりの的確なコメントに、俺は焦りを隠せなかったようだ。
いつもの悪い癖だな。これは。
「あのっ。私、クラスが優勝するために頑張るから。その、弘明君にも応援してほしいな」
千奈津が出場したい。そう思うのであれば、俺が止める理由なんてどこにも無かった。
ここで応援してあげるのが、幼馴染みってもんである。
「頑張れよ、千奈津」
そうして、俺は千奈津の肩を軽く押してやった。

※

他学年の競技が終わり、再び一年生の種目が行われる。
三種目の絵画競争では、黒魔術が大好きな松橋がそれらしい絵を運動場に描き、一位を獲得した。
ちなみに、一緒に出場したひばりもそれなり頑張ってくれた。頑張ってくれたんだと思う。
次の障害物競走は、軍オタの中山が本領を発揮して一位に。

その勢いのまま、午前競技の最後になる仮装対決が始まる。
競技内容は普通にコスプレをして、いかに審査員の受けを狙うかという、ある種の水着コンテストみたいなものである。
審査員は、他学年からランダムで選ばれた５人。全員男性である。
俺はクラスのテントから、出場する川辺と千奈津の動向を静かに見守る。
「いい点数を取れるといいな」
「今までの最高点が２８点だからな。こっちの予想が成功するか失敗するか……」
Ｃ組までのクラスは、アイドルや女優のコスプレをして低い点数を出してきた。
そんな中、俺達Ｄ組はアニメ関係の方面で責める。
一種の賭けに出た吉松の考えが、吉と出るか凶と出るか。
『次は、Ｄ組の出番です！』
そんな不安の中、アナウンスと共に二人が盛大に出場する。
「この世に悪が存在する限り」
「わ、私たち、プリティーキュアフルが」
「「成敗します！」」
アニメのワンシーンを再現しながら、二人は中央でパフォーマンスを繰り広げる。
それを見て観客は。
「うおぉぉぉ！　プリティたん！」
「かわいいお！　かわいいお！」
「キュアフルたん！　こっち向いて！」
「お仕置きして～！」
男たちは、まるで盛んだ豚のように声を上げていた。
このクラスの横川も隣で同じように。
「うおおぉぉぉぉぉ！　プリティーキュアフル、キタコレ！」
テンションが上がっていた。
どうやら二人は、アニメのキャラにかなり似ているら

しい。
だから千奈津はツインテールにしたのか。なるほど。
何かのイベントみたいな盛り上がりをみせて、D組のパフォーマンスは幕を閉じる。
気になる審査員の結果はどうなったかと言うと。
『審査員の点数が出ました！　４６点、一位です！』
今日一番の最高得点が叩き出された。
吉松の考えが、上手いこと的中をしたらしい。
これで残るは、綱引きと徒競走だけだ。

最終幕

昼休憩を終えて、組体操と綱引きが行わる。
組体操は学年全体の競技なので、得点は加担されなかった。しかし、その次の綱引きは今までで一番の点数が入った。
D組は、デブの横川の活躍によって最下位を免れたが、相撲部や柔道部で固めてきたC、D組には為すすべもなく、あっさり惨敗してしまった。
そして残るは、最終競技である百メートル徒競走。
現在の一位は、我らD組の７６点。二位はC組で７４点という具合であった。
この百メートル走の得点は、一位に１０点。二位に７点。３位に５点がそれぞれ加担される。
なので、もしも俺が２位で、C組の人間が１位になったら、C組に逆転勝ちされてしまうわけだ。
何としてでも、俺が勝たなくてはいけない。
そんな重いプレッシャーが、俺の体に伸し掛かる。
『次は、最終種目の百メートル走です。参加する方は、待機所まで移動してください』
「時間だな。それじゃあ、行ってくる」
俺は念入りに準備運動をした体を起こして、クラスのテントから出ようとする。
そんな中、まるで戦地に向かう兵士のように、みんなからの熱いエールが送られる。
「任せたぞ、弘明。後はお主にかかっておる」

「弘明君。わ、私。信じているから」
「頼んだ！　伊藤！」
「伊藤！」
「伊藤君！」
「弘明！」
「お、おぅ……」
クラス全員の期待を背負いながら、俺は待機所に向かう。
これだけ期待されると逆に変なプレシャーもあるが、頑張るしかない。
「……みんなが俺のことを信じているんだ。大丈夫。俺ならきっとやれる」
独り言をぶつぶつ呟きながら、目的の場所まで歩く。
これ以上、悪い事なんて起きるはずもない。
そう思っていた矢先、俺は今日一番の不幸に見舞われた。それは……。
「おっと。これはこれは、伊藤君ではないか」
「――御船ッ！」
最後の百メートル走の相手が、御船であったことだ。
こんな相手と走ることになるとは、C組の方も仕組んできやがった。
「何だが、D組が頑張っているみたいだけど。所詮、負け犬の遠吠えだ。俺らC組に勝てるわけがない」
「……甘く見ていると、揚げ足を取られるぞ」
「俺がそんなヘマをすると思うか？　まっ、精々頑張ってくれ。元サッカー部の俺に勝てれば、だけどな」
「俺だって、元陸上部だ！」
『――次は、一年生の百メートル走です。出場する方は配置についてください』
試合開始の時がきた。
御船は、余裕の笑みを見せながら早々と行ってしまう。
まるで、俺なんか敵でもないかのように。
「……幼馴染みの意地ってもんを見せてやる」

※

『位置について』

審判の一人が、スタートを合図する空気銃を頭上に向ける。

俺は、深くゆっくりと息を吸い込みクラウチングスタートの体勢を取る。

スタート時に足を滑らさないように、つま先をしっかりと地面に固定した。

目指すは、コーナーカーブを曲がった先にある白いテープ。

目線を前に向けて、どのように進むかをイメージする。

『よ〜い……』

審判は引き金に指を当てる。

俺は、体全体の体重をつま先に集中させた。

上手いことスタートダッシュをさせると同時に、フライングにならないよう絶妙なバランスを取る。そして。

――バン！

空気銃の合図と共に、全力で地面を蹴り上げた。

スタートダッシュを成功させた俺は、Ａ組、Ｂ組の生徒よりは一足先に進んでいるが、御船には差をつけることができなかった。

最初の１０ｍは、どちらも同じぐらいの速さで進む。

流れに乗り始める１５ｍ地点で、少しずつ差が生まれる。

残念ながら、俺はその流れに乗ることができず、御船に少しずつ引き離されていくことになる。

５０ｍ地点になったところでは、コンマ５秒程の差ができてしまっていた。

このままでは負ける。

そんな不安が脳裏をかすめた途端に、自然に体が硬くなっていく感覚に襲われた。

コンマ５秒の差が、６秒に変わる。

速く走らなくては負けてしまう。しかし、そんなことを思う度に体はどんどん硬くなり、スピードも落ちてい

く。
残り３５ｍ――。
俺は、絶望を感じていた。
俺は御船に負けるのだ。俺は、千奈津を守ることができなかったという、負のオーラが体を覆い始める。
もう、潔く諦めたほうがいいのかもしれない。
そんな考えも、頭の隅の方でポツンと浮かぶ。
全てを投げ捨ててしまおうと感じたその瞬間。俺はある声を頭の中で感じた。
それは、よく聞き慣れた声で、どうしても失いたくない大切なモノであった。
「……弘明君！　頑張って！　負けないで！」
千奈津が、クラスのテントから必死に応援をしてくれている。
それも、今まで聞いたことのない全力の声で。
よく聞くと、クラスのメンバーも俺のことを必死に応援してくれている。
……そうか。俺はまだ頑張れるんだ。
その希望が、体の筋肉を柔らかくしていく。
衰えていたスピードも徐々に加速していき、御船との距離を縮めていく。
コンマ７秒から、５、４、３秒へと。
そうだよな。こんなところで、負けられないよな。だって、俺はみんなの期待を背負っているのだから。
体が自然に軽くなる。先ほどの疲れも、一気にどこかへ吹き飛んでしまう。
俺は、ただひたすら前を向いて走り続けた。
ゴールテープまで残り１０ｍ。ラストスパートだ。
俺は残っている全ての力を使い、急加速させる。
６ｍ、５ｍ。
御船も、必死で逃げ切ろうとするが、俺の速さには勝てない。
４ｍ、３ｍ。
頭がクラクラしてきたが、俺は加速することを止めない。
２ｍ、１ｍ……。

――バンッ！

……ゴールの合図が、運動場内に鳴り響いた。

誰もがその瞬間を、息を飲むようにして見ていたことが分かる。

俺は、ゴールから数メートル進んだところで、思いっきり地面に倒れ込んだ。

今はただとにかく、息継ぎをすることに精一杯であった。

「弘明君！」

少しぼやけた視線の先に、千奈津が駆け寄ってくるのが分かる。

俺は体を起こして座り込みながら、体力を回復させていく。

「ハァ……ハァ……。ち、千奈津。さっきの勝負……

…どっちが勝ったんだ？」

「まだ分からない。今、記録係が確認しているから。あっ、これ水」

「あ、あんがとう」

千奈津が持ってきてくれたペットボトルの水を、俺は勢いよく体に押し込んでいく。

とてもすっきりした感覚が、体の中に襲う。

座って小休止している間にも、他のクラスメイトも俺の周りに集まってくる。

そして、少し時間が経ったところで、校内アナウンスが流れる。

『え～。先ほどの競技の結果が出ました。一年生百メートル走、一位は――』

誰もが結果に耳を傾ける。

スピーカから流れてきた言葉は。

『――D組！　結果、一年生の優勝はD組になりました！』

「うおおぉぉぉぉぉぉぉ！」

運動場に響き渡る歓声。

遂に、学年で一番底辺のD組が、体育祭で優勝することができたのだ。

クラスメイトは全員感極まって、暴れている。

一方、2位になったC組の御船はと言うと。
「ま、まさか!? 有り得ない！ 俺が負けるなんて……」
現状を把握することができていなかった。現実逃避に近い何かをしている。
「や、やったよ！ 弘明君！ 私たち、勝ったんだよ！」
千奈津は嬉しそうに俺に抱き付いてくる。
今思えば、千奈津が抱き付いてくるなんてこれが初めてだな。たぶん。
「これで、俺らが離れ離れになることはなくなったな」
「うんっ！ ずっと一緒に居られるね」
「ずっと一緒って、千奈津……」
千奈津は、自分の言ったことを振り返り、少し照れたような顔をする。
その照れた顔のまま小声で。
「で、でも。弘明君とならずっと一緒にいても、私はいいかなって思ったり……してるかな」
告白染みたことを言った。
いや、むしろこれは告白なんじゃないか。
千奈津は、何かを期待するかのような顔で俺を見ている。
……ここは、自分に素直になった方がいいな。
「お、俺も。千奈津のことは昔から、好きだった……ぞ」
「弘明君……」
俺の返事を聞いて、千奈津は自然に涙を流した。
「ちょっ！ なに泣いてるんだよ」
「いや……だって。ずっと想ってきた人と、結ばれたんだもん。嬉しすぎて涙ぐらい出るよ」
「千奈津……」
俺は、優しく千奈津を抱きしめる。
「ゴホンッ！ 周りを気にせずに、何だがいい雰囲気になっているのぉ。お二人さんよ」
「あっ……」
そうだった。今は体育祭中だった。そう思うと、周りの視線が急に痛く感じる。
でも、これで俺と御船の賭け対決は、俺の勝利で幕を閉じることになった。

そして、俺と千奈津は幼馴染みの関係から、正式なカップルとして新たな運命を歩み始めた。

〜完〜

あとがき

今回は、この異様に長いタイトルの本を手に取って頂き、誠にありがとうございます。

久しぶりにラノベ調で書いたので、至るところで読みにくい部分もあったかもしれませんが、最後まで読んでくれた方は本当にありがとうございました。やはり、文章を書くのは難しいことですね。

この作品には車が出てきませんが、つい先日、自動車免許を取得しました。車はまだ持っていませんが、ドライブにでも出かけたい気分です。新しいアイデアが浮かぶかもしれませんしね

短いあとがきになりましたが、これにて終わらせていただきます。

感想がありましたら、ぜひともお願いします。

それではみなさん、さようなら。

２０１３年１１月　カワサキ